



一 はしがき

私 が橋に興味を持ち出したことも久しい。併し南佛^{ポンド}・ド・ガール^の羅馬の古橋の上に立つて、此の偉大なる人工を間寂たる夕暮に、人里離れた自然の間に眺め入つた時ほど、橋に就いて深く感じた事は無かつた。其後羅馬の古都に昔ながら残つてゐる當年の古橋を渡り、

エネチャの「リアルトの橋」、フイレンツエの「ポンテ・ベッキョ」と中世以後の橋を見るに及んで、私は故國にどれ丈けの古橋が残つてゐるかを考へさせられた。

日本には勿論こんなに幾百千年と云ふ古い橋は一つも残つてゐない。併し橋の美しさは決して古い橋には限らぬ。周防の錦帯橋の奇観は別としても、ホイスターの如きはたゞ名も無い日本の橋を畫題として、あの様な名畫を作つてゐるのでは無いか。更に支那に於いては、到る處太鼓橋の奇巧が趣味深い自然に特殊の感興を添へてゐるのを認めない譯には行かぬ。私は斯う考へては曾遊の支那に思を馳せて、洛陽の天津橋の斷礎を前にして、○博士とカメラを立てた日を記憶の



(關野博士寫真)

支那洛陽天津橋斷址

中から喚び返した。

併し私は橋に關する特別の研究をする希望も無かつた。又今日と雖も之を有しない。然るに丁度數年前思ひ掛なくブラングウィン氏とスバロウ氏共著の『橋の書』(Brangwyn & Sparrow, A Book of Bridges)と云ふ一冊の本を手にした時、西洋にも亦橋に特別の興味を持つてゐる人々のあることを知つて、共鳴せざるを得なかつた。而して、之を卒讀するに及んで、好事家の贅言も頗る多いが、亦頗る我が意を得たものゝ鮮なくないのに驚いた。更に又此の書の豊富なる色摺の挿繪は、固より名高い畫家ブラングウィンの手に成つたもので、本文よりも一層私の心眼を唆るものが大きかつた。

ブラングウインの畫は、私をして橋に就いて何か書いて見度いと思ふよりも、先づ何か橋の畫を描いて見たいと決心せしめて、遂に朝鮮に於ける一二の橋の「スケッチ」を作らしむるに至つた。ブラングウインならぬ素人の拙畫は、たゞ人の物笑ひとなり、自分ながら裂いて仕舞ひ度く思ふに過ぎないものであることは斷る迄もない。若し此の畫に似て畫ならぬものゝ一枚が、去る人に奪はれて何處かに掛けられてあるならば、其は私の厚顔では無く、其人とブラングウインの罪である。

それは扱て私の橋に對する興味は、たゞ隨筆的のものであつて、何處迄も學究的ではない。橋梁工學などに關する何等の知識もない自分には、現在の橋の構架に向つて敢て論議を挟む野心も無いが、去年の大

震災によつて多くの橋が焼失し其の教訓によつて新に橋の改造が東京や大阪に於いて行はれると云ふことを聞いて、私の橋に關する興味は再び湧いて來た。而してかの拙畫の如き此の一篇を書き上げようとする希望だけは遂に止めることが出來なかつた。

二 天然橋と橋の起源

さて橋とは何か。その答へは簡單である。道路水路車道などあらゆる道が、水流谿谷他の道路等の障害物を避ける爲めに作られたる構造、即ち橋と稱す可きものである。併し就中古來人類の通行を妨害

するものとして、最も著るしきものは水であつたから、水の上を越える爲の橋が、最も普通の「橋」と云ふ觀念を我々に與へるのである。

人類は併し橋の創始者では無かつた。人類以前の猿に似た動物も恐らく橋を作つたことは、今日類人猿などが、多少此の道路の障害を除く可き設備を試み、又は自然物を利用することがあるのを見ても容易に之を想像することが出来る。溪間に倒れかゝつた樹木其の間を連絡してゐる蔦葛の類は、猿猴も決して之を見逃さない。谷川に散亂する飛石は彼等も之を足止まりにして、彼岸に渡つて行けば、毛脛を濕す恐れもないのである。今日朝鮮などで所謂「令監レムガ」などがやる様に、その邊に居る男を呼び止めて、其の肩に負さつて河を渡ると云ふ横着な方

法は固よりザラには無い。それはたゞ子猿に限られた特權であつた。此の人類以前の自然物利用の橋が即ち我々の橋梁の祖先であることは、夢おろそかに忘れてはならぬ。此の石の飛石が今日の鐵橋、石橋の橋臺となり、倒れ木は「コンクリート」鐵材の構桁となり、蔦葛が吊橋となつたことは「ピテカントロプス」(Pithecanthropus)にでも見せたならば早速見破つて、人類の發明權は立どころに奪はれるに違ひあるまい。而して此の自然物の利用は次に彼等をして、之に類似の構造を新に試ましめることになり、遂に今日見るが如き人類の橋が生れ出でたのであつて、彼の穹窿形の橋と雖も、矢張り自然に出來た洞橋から眞似たものであると云はれてゐる。とにかく穹窿其者も一つは斯んな自然的

構造から思ひ付かれたものであらう。自然の洞橋即ち「岩橋」とも稱す可きものは日本にも各地に澤山ある。たゞそれを今日我々が山水の奇勝として見るのみで、古代から人類が盛にそれを利用したものが否か、能く分らぬ丈けである。此類の岩橋のすばらしいものはニウグレナダ (New Grenada) のイコンゾンズ (Icononzo) にあるスムマ・パズ (Summa Paz) の急流の上の二つの自然橋であらう。其の一つは高さ九十七尺の大きな穹窿をなして、其の下には奔流が逆巻いてゐる。佛蘭西のアルデシユ (Ardeche) の河上にある「ポン・デルク」 (Pont d'Arc) の岩橋は、高さ百尺長さ百八十尺の「アーチ」を作つて、一大奇觀を呈してゐる。斯の如き長い「アーチ」は羅馬人の出る迄は、恐らく人類の橋梁として到底企及し得

なかつた所であらう。

哺乳動物の靈長類として、造化から鳥の如く羽翼を恵まれなかつた人類は、斯の如くにして、橋梁の完成者として残さる可き自然の運命を持つて居つた。——彼等が遂に自ら羽翼を作つて空中を飛行することを完成する迄は。

三 橋の天才羅馬人

埃及人は墳墓の大建築者であり、アッシリヤ人は宮殿の營造者であり、希臘人は神祠の完成者であつた如く、橋の大建設者は羅馬人であつ

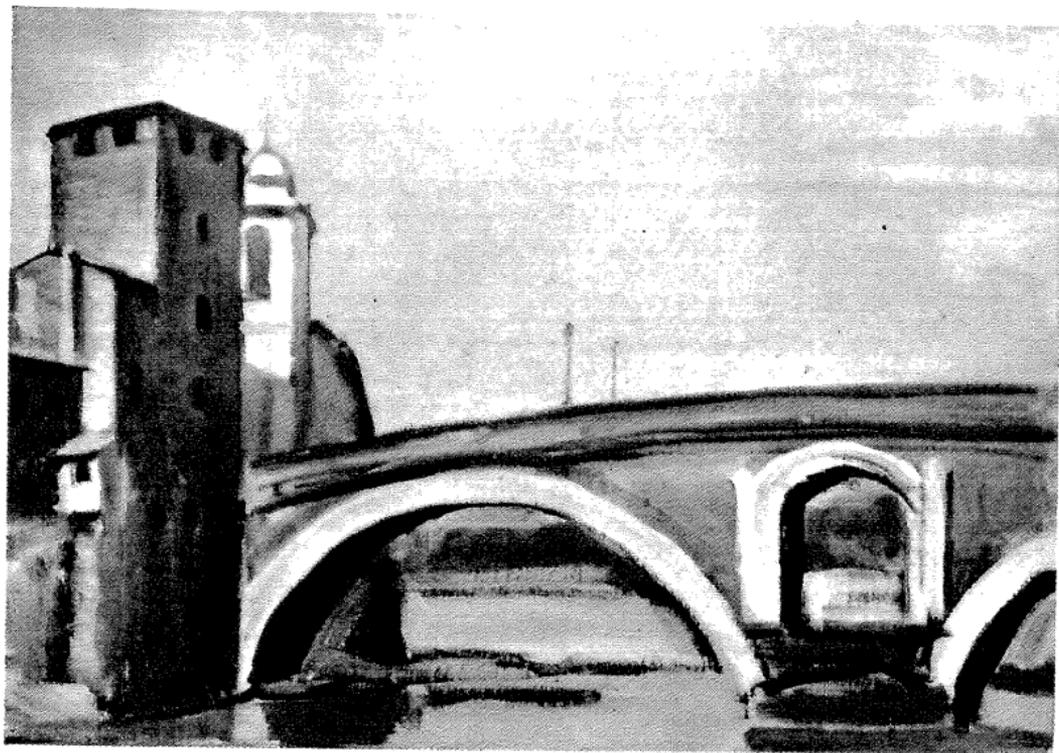
た。彼等は多くの技術を其の先住者エトルスキ(Etrusci)から學び來つた如く、橋の建築も亦彼等の先蹤を逐うたに過ぎなかつたが、かのピエダ(Vieda)やブルチ(Vulci)にあるエトルスキの橋の遺物を以て、羅馬人の造り上げた偉大な人道橋、水道橋に比較すれば、エトルスキの技術から出で、藍よりも青い羅馬人の大天才を驚嘆せずには居られない。之をしも單なる土木建築に過ぎずと貶し、實際的用途を出でない「粗惡な石工」と評するが如きは、極端な希臘崇拜家の外は誰人も與みせぬ所であらう。

「久遠の都羅馬に遊んだものは如何に急ぎ旅の人でも、テベレ(Tevere)の河向ふに立つてゐる聖アンデロ城(元はハドリヤン帝の陵)を瞥見せ



11

伊太利羅馬聖安傑羅橋



〔太田喜二郎君畫〕

伊太利羅馬斯威士橋

ぬものは無からう。此の城の前に架せられてある聖アンヂエロの橋 (Ponté Sant' Angelo) は實に羅馬に残つてゐる久遠の橋の一つである。ハドリヤン (Hadrian) 帝の創建後、法王ニコラス十世 (Nicholas) クレメン ト (Clement) 九世などの時の修覆はあつても、なほ羅馬時代の橋の稱號を冠せしめる可きであらう。併し更に古く且つ更に善く保存せられてゐるテベレの橋は、中島 (Insula Tiberina) を連絡する「ポンス・フッブリチウス」(Pons Fabricius) と「ポンス・ケスチウス」(Pons Cestius) の二橋である。共に紀元前一世紀の架設であるが、殊に前者は殆ど全く當時の儘の面影を存し、我等は今なほフッブリチウスの作つた昔ながらの橋を渡ることが出来るのは何たる幸福であらう。此橋の「アーチ」は、多少扁平形になつ

てゐるのは、技術上注意す可きことで、中世に名高い南佛アヴィニヨン (Avignon) の聖ベネゼー (Saint Bénézet) の橋などの祖型をなすと云はれてゐる。

是等の石造のアーチ橋の上に立つて、今も變らぬ石橋の形式と、昔ながらの頑丈な構造を見て、是が果して二千年にも近い古への人の作った橋であるとは、恐らくはベテカーの案内記を持たない人には信じ得ないであらう。併し我々の此の驚嘆よりも、若しも今日羅馬人をして倫敦橋の上に立たせたならば、二千年後の我々がなほ彼等の完成した橋の形式を墨守して、殆ど多くの進歩をなし得なかつたことに、一層の落膽を禁じ得ないことゝ想像する方が合理的であらう。

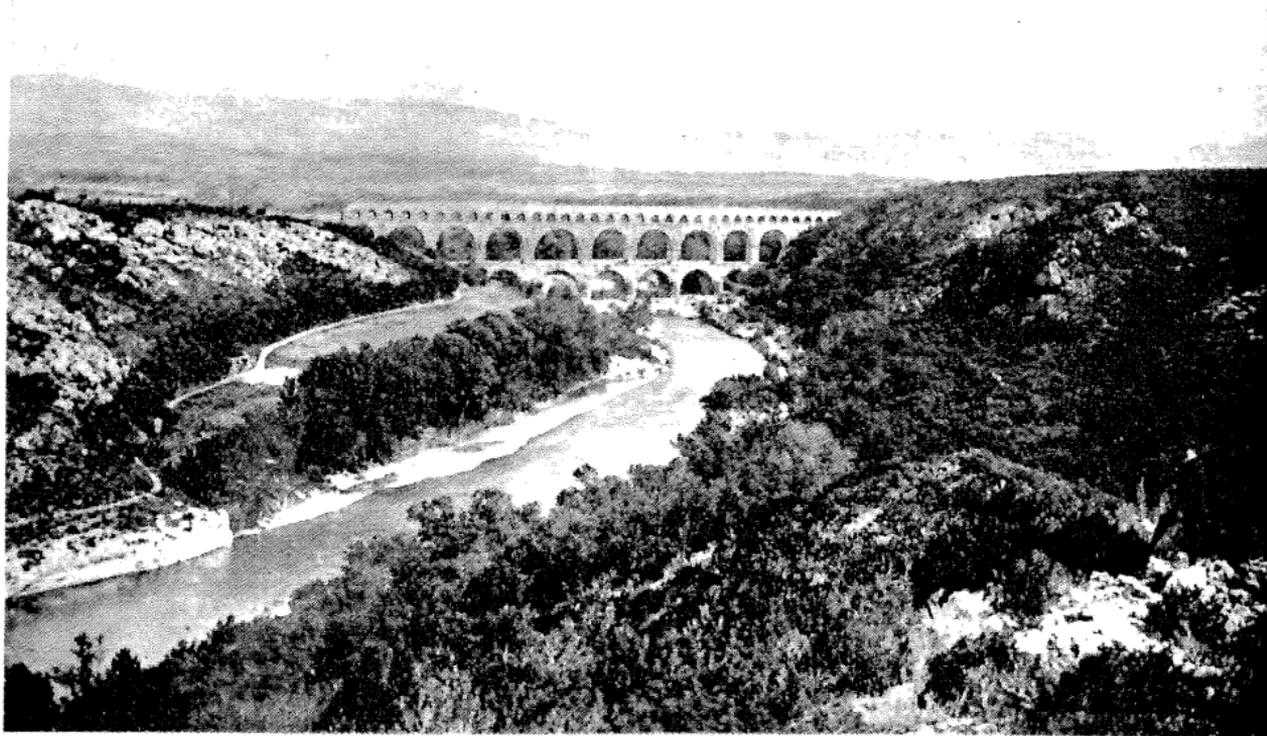
羅馬の橋と云ふものゝ中には、又あのカムパニヤ (Campania) の曠野に、數里の長さに見つて櫛の齒の如く斷續してゐるクラウヂウス帝 (Claudius) などの水道橋を其のうちを含めることを忘れてはならない。此の餘りに詩材になり過ぎた遺物、畫題に應はしい古代の片身は、往々旅客をして大建築として見ることを忘れて、たゞ漫然風景の一部として取扱はしめるのが常である。

四 「古橋の國」佛蘭西と西班牙

羅馬の古都に羅馬人の残した橋の遺物に驚いた旅客も、更に南佛

や西班牙に旅して、一層壯大な羅馬人の橋梁建築の多くに接しては、終に此の空前の天才に向つて、如何なる賞嘆の辭を冠す可きかを發見するに苦しむであらう。實に彼等の橋梁建築の大技術は、其の本國に於てよりも僻遠の領土内に於いて、一層著るしい表現をなしたのである。獨り佛、西兩國のみならず、或は北阿弗利加アルジェリヤ(Algeria)に於いて、小亞細亞スミルナ(Smyrna)などに於いても殆ど同様の大工事の行はれたのを見るならば、當時羅馬領内の人民は、羅馬人の武力に征服せられるよりも、却つて此の大建築の前に屈服せざるを得なかつたことを思はしめる。

私は南佛古への羅馬領内に残つてゐる數々の古橋の遺物を、一々列



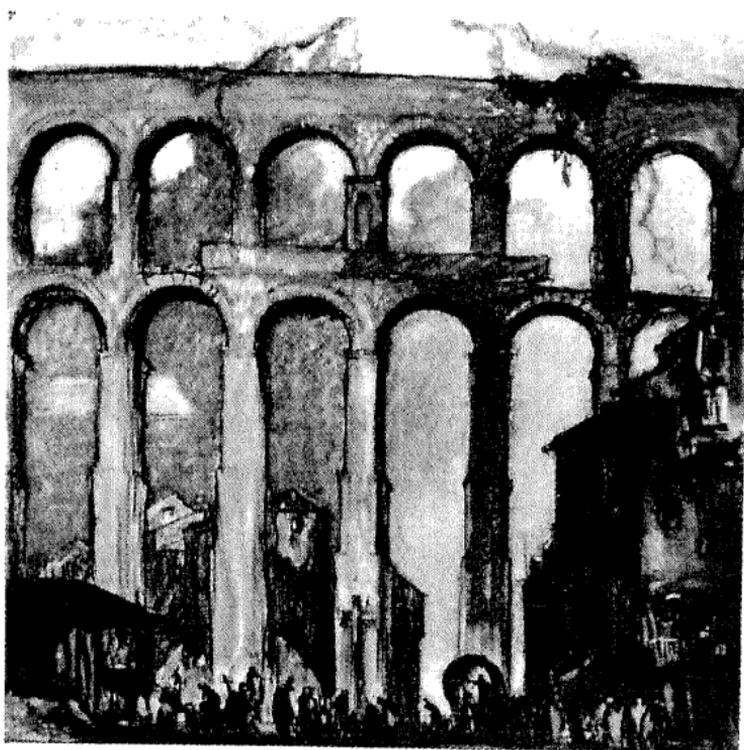
四

橋ルーガ・ド・ンボ四蘭佛

舉する違を有しない。是等の中には其の畫趣に於いて、其の歴史に於いて、或は却つて最大のものよりも、最もよく保存せられたものよりも、吾々の注意を惹くものがあるかも知れない。併し若し佛蘭西に於ける羅馬の古橋を唯一つしか述べる時間を持たなかつたならば、誰人も「ポンド・ガール」(Pont du Gard)を舉げることには躊躇しないであらう。否、な全世界を通じて羅馬の橋の最好例として、常に其の選手たる權利を失はないのは此の橋であらう。

羅馬の小都會ニーム(Nîmes)に近い「ポンド・ガール」は主として此の町へ給水の爲めに設けられた水道橋であつた。恐らく紀元前十八年アグリッパ(Agrippa)の作つたもので、全長九百尺、高さ百六十尺、三段に大小

の「アーチ」を並べ一番頂上に水路が走つてゐる。勿論全部石造であつて、其の石材は其の場處の石灰岩を使はずに、却つて對岸の「オオライト」(Oolite)を用ひてゐる。私は歐洲大戦争の正に酣なる頃、訪ふ人もない夕暮に此の橋上に立つて、ルソー(Rousseau)と共に「此の無限の大きさの下には自から一つの蟲けらの如く小さく感じ」、キングスレー(Kingsley)が「我が最初の印象はたゞ恐怖であつた」と告白した言葉の偽ならぬを覺えた。而して「永久に残るには餘りに完全である」との嘆を新にする外はなかつた。橋上二箇所「永壽の印」として「フワルス」(Phallus)を刻してあると云ふが「コロセウム」(Colosseum)倒れて羅馬は亡んでも「ボン・ド・ガール」は永遠に残るかも知れない。



橋道水ヤヱゴセ牙班西

〔アラングウィン氏原畫〕

併し佛蘭西の「ボン・ド・ガール」と比べても敢て劣らない羅馬時代の大橋梁は、西班牙のターグス(Tagus)河の谿谷に架つてゐる「アルカンタラ」(Alcantara)(ムアー語、橋の義)の大石橋である。全長六百七十尺高さ二百十尺、大小の「アーチ」六個から成り、少しの漆喰をも用ひて居ない。憾むらくは其後サラセン人(Saracens)などによつて破壊せられた部分があり、其處を修繕した後人は却つて「セメント」を用ひる外はなかつた。

「アルカンタラ」の人道橋と共に、西班牙に羅馬時代の水道橋の大作が今一つ残つてゐる。是はセゴヴィヤ(Segovia)の町にある「悪魔の橋」と呼ばれてゐる鬼工である。高さ百三十二尺、全長二千五百餘尺、上下二段の「アーチ」は固より漆喰なしの石造であつて、橋下にセゴヴィヤの人家が小

さく立つてゐる奇観は、ブラングウィン氏をして一幅の名畫をなさしむるに足る好畫題であつた。

此の外メリダ (Merida) サラマンカ (Salamanca) ヴイラ・デル・リオ (Vina del Rio) ロンダ (Ronda) などにある羅馬時代の古橋から、コルドヴァ (Cordova) 附近にある「ムアー」時代の橋を見歩いたならば、クラケット (Crackett) 氏と共に誰でも「石木葉切株の不用の橋、三角の奇妙な橋まであるが、一つとして不格好な橋はない」西班牙の橋に關する書物を一冊も賣れなくても宜いから書いて見度いと叫ぶに違ひ無い。

五 中世の防護橋

羅馬の橋は實用を主とする土木建築に過ぎないと、罵倒する批評家の言葉に與みしなかつた私も、實は羅馬人の建築殊に橋梁に對する美術的趣味が、頗る豊富であつたとは辯護し得ない。彼等が橋梁に現はした美は、其の簡素 (Simplicity) と偉大 (Greatness) の美であつた。今日其の環境と歴史とによつて、我等は更に一層の感懷を催すものがあるに違ひないが、是は固より彼等の豫期した所では無かつた。之に比べると、中世から復興期の橋に至つて、此の簡素と偉大の外に幾多の變化

と精彩を橋の美に加へたものあるを認めざるを得ない。かくて環境と歴史の美は、更に數倍の面白さを加へ來つたことを覺えるのである。「ゴシック」建築の尖頭「アーチ」が橋梁に應用せられたことは其の一である。橋梁が封建戰國の時代の反映として、要塞的の防護工事を施されたことも其の二である。基督教の盛大と宗教心の深刻を加へて、橋梁にも禮拜堂の類が附加せられたこと其の三である。地方の都會生活の繁榮と共に、橋梁の上に家屋店舗が設けられたこと其の四である。此の外田舎の産業的生活と關係して、或は水車小屋などと結合を見たことも其の五として數へることが出來よう。斯の如くにして橋梁は、人間生活と密接の交渉を生じ、其の美觀が愈々、複雑を加へて來たこと

は、歐羅巴に旅し、或は其の風景畫に接したものの、痛切に感ずる所である。

中世の數多い橋梁に就いて、私は其の孰れを擧げ孰れを措き去る可きかに迷はざるを得ない。南佛ミロウ (Milan) にあるタルン (Tarn) 河上の斷橋に残つてゐる水車橋の如きは、獨逸のクロイツナッ (Kreuznach) にある奇古な家屋の附いてゐる橋と共に、最も畫趣の捨て難いものの一であらう。東部西班牙のエルケ (Elche) にある禮拜堂の附いた「ゴシック」の橋の如きは、此の類の橋として唯一の例とするには物足らない。要塞堡壘の附いた橋に至つては、中世の騎士城塞の名を數へると同じ様に、其の選擇に苦しむ。ブラングウインの描いた畫の中からでも、佛蘭

西コオール (Cohors) のヴァレントレン (Valenté) の橋、パルトネー (Partheny) の橋、獨逸バヴァリヤ (Bavaria) のウヰルツブルグ (Würzburg) のマイン河 (Main) 上の橋、コブレントツ (Coblentz) のモーゼル (Mosel) 河上の橋、其他一々に捨て難いものがある。

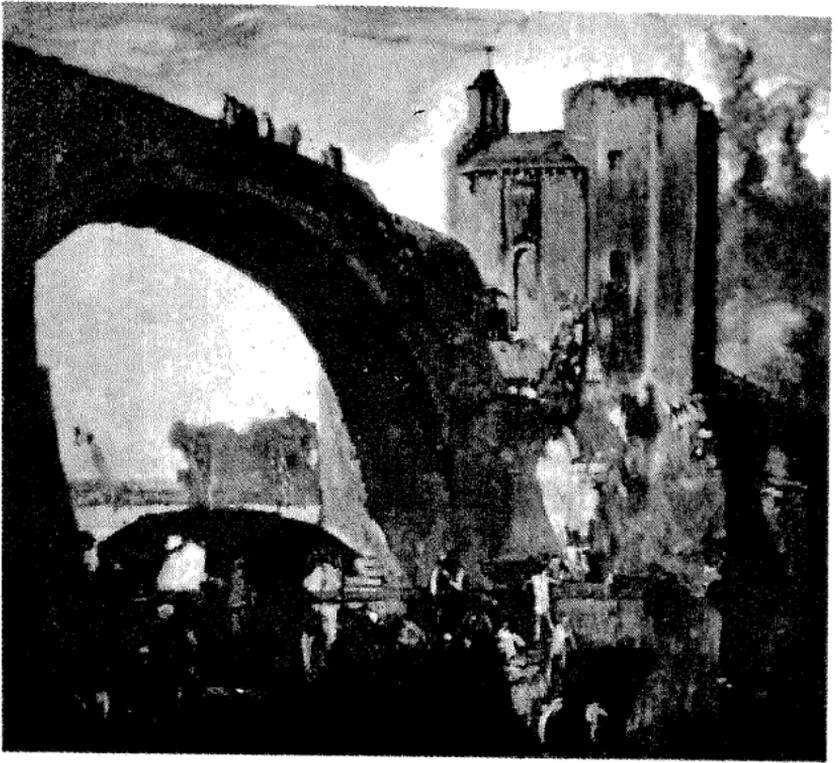
併し私の見た橋の中から其の例を取るとなれば、見界の狭い丈けに其の困難は甚だ少い。羅馬の郊外カムパニヤの野、古へのノメンターノ道 (Via Nomentano) を、アニオ (Anio) の小流に架つてゐる橋こそは、中世の橋として堡塞化せられた橋として最も好い一例と云はなければならぬ。羅馬史を読むものは、其の開卷第一に平民と貴族との争闘と云ふ如何にも現代めいた事件に出會するであらうが、此の時平民連の立

て籠つた聖山の丘は即ち此の橋の附近である。それ以來此の橋と織り成した歴史と傳説の數々は、恐らく一卷の書をなすかも知れないが、此の「ポンテ・ノメンターノ」(Ponte Nomentano) の小さい橋は、羅馬の橋の上を中世の堡塞を以て被覆した一個の結晶である。橋か將た要塞か、羅馬か將た中世か。「ポンテ・ノメンターノ」の中を過ぎて之に迷はざるものはあるまい。

中世に至つては架橋の大工事は諸侯の割據と財政の困難其他の事情によつて、羅馬の軍國政治の時代の如く容易くは行はれなかつた。南佛モンタウバン (Montauban) の「ポン・デ・コンシユール」(Pont des Consuls) の「ゴシック」式の橋の如く、今日我々の賞讃を博してゐる美しい橋も、實は百

年間建築に躊躇紛糾した曉、二人の「コンシール」を置いてモンタウバンへ來る旅客から一々税金を徴して、漸く一三三五年に竣工したものであると云ふ。

併し中世の橋梁事業に大なる貢獻をした「橋梁僧團」(Frères Pontifes)の活動は、我々の永く記憶しなければならぬ事であらう。此の僧團は元々伊太利から起つて、「聖ジャックの大道僧團」(Saint Jacques du haut pas)と呼ばれたもので、ルッカに其の本據を有し、一二八六年佛蘭西の巴里に庵堂を設け、盛んに活動をしたことは、日本でも行基菩薩、弘法大師などが、各種の拓植事業に盡力し、純宗教的活動の外に、社會的厚生の方面に貢獻したことと相似てゐる。此の「橋梁僧團」の手によつて出來た大小の



佛蘭西阿尼翁聖維塞橋

橋は固より枚擧に違はないが、かの南佛羅馬の「ボン・ド・ガール」から遠くないローヌ (Rhône) 河上に架けられた「ボン・聖エスプリ」(Pont Saint-Esprit) の橋は、實に其の好記念物と云ふことが出来る。是は一二六五年から一三〇七年の間に建造せられたもので、全世界の石橋中最長のものゝ一であり、全長二千二百餘尺、二十六の「アーチ」から成立つてゐる。スバロウ氏の所謂最も男性的の橋の一であつて、其の橋臺の船形になつてゐるのは、正しく船橋の遺風であらうと思はれる。

南佛アヴィニヨン (Avignon) にある聖ベネゼーの橋 (Pont Saint Bénézet) は、今は悲しい哉、一部斷橋になつてゐるが、矢張り僧侶の手によつて造られた中世の橋の代表である。これは一二三四年から七年の間に聖ベ

ネゼーの手によつて出来たもので、橋上に此の聖人の御堂が立つてゐる。「アヴィニヨンの橋の上で、圓くなつて皆んなが踊る」と云ふ歌を聞くものは、プロヴァンス (Provence) の情緒と此の橋とが、如何に深い因縁を有してゐるかを想像することが出来る。

六 復興期の家橋

リアルトの橋！水の都アドリヤ海の配偶、ヴェネチヤに遊んだものは、支那の太鼓橋の如く運河の上を過ぎつてゐる此の橋を「ゴンドラ」舟で通らないものはあるまい。併し忙しい旅客は或は橋上を通過して、



ヤ

橋トルアリ河運ヤチネヅ利太伊

其の橋廊が色々の御土産を賣つてゐる店舗に満されてゐることを見忘れるであらう。

此の不思議なる廊橋、家橋がヴェネチヤ(Venezia)共和國の昔、一つの「デパートメント・ストア」の如く、銀座通りの焼失以前の如く、心齋橋通りの今日の如く、ヴェネチヤ繁華の一中心であつたことを知らねばならぬ。綺羅星の如きヴェネチヤの士女が此の橋上に集り、運河の上を龍頭鷓首にも似た大統領の「ゴンドラ」が行列を作つて流して行つた光景を想像せよ。

リアルトの橋(Ponte Rialto)は一五八八年アントニオ・ダ・ポンテ(Antonio da Ponte)の作つた處であるが、橋としては必しも優秀なものとは云へ

ないかも知れない。當時アントニオはパラディオ(Palladio)と此の橋の意匠を競争して、元老院は却つて拙いアントニオの方に團扇を揚げたとのことである。なほ此の水郷に名高い「嘆息の橋」(Bridge of Sighs)は、橋としては實は稍、新しいものであり、又別に見るに足る可き程のものではない。

花の都フィレンツェ(Firenze)にある「ポンテ・ベッキョ」(Ponte Vecchio)の橋は、又此の廊橋の一つであつて、其の橋上に列つてゐる小店は如何にも世界の世界に人を彷徨せしめる。其の名に負ふ通り、此の橋は古く羅馬時代からフィレンツェにあつたのを、一三五五年にタッデオ・ガッヂイ(Taddeo Gaddi)の再修したものであると云ふ。「キクロイド」形の「アーチ」三個は洵

に調和もよく、稍、反り氣味の橋路もよいが、若しも橋上の廊屋が立面に於いて更に多少の變化を示して居れば、一層面白かつたらうと思はれる。

此の橋に比べては廊屋の無い「ポンテ・デラ・トリニタ」(Ponte della Trinita)の方が、復興期の橋として、フィレンツェ中、否、全歐の傑作と稱すべきものであらう。其の三個の「アーチ」は「キクロイド」形の美はしい曲線を見せ、中央と兩端とは大きに相違を示してゐる。凡てに於いて學術的の造詣と、美術的成功とを併有して居る此の橋は、一五六六年バルトロメオ・アマナーチ(Bartholomeo Ammannati)の手腕から生れたものである。ダメンテの生時には「ポンテ・ベッキョ」は洪水で落ちた儘であり、其の外には今一つ

の「ポンテ・ル・バコンテ」(Ponte Rubaconte)があつた丈けであると云はれるから、此の詩人の親しく渡つた橋は今日一つも残つてゐない。

中世の家橋として我々は今一つ英國の倫敦橋に就いて言及して置かう。今日倫敦で一日十萬人の徒歩者が通過すると云はれる倫敦橋(London Bridge)は一八三一年ジョン・レンニー(John Rennie)の設計で出来、七十二萬圓を費したと云はれるが、それ迄は一二〇九年ジョン(John)王の時に完成した古い石の橋であつた。此の中世の橋は矢張り「ポンテ・ベッキョ」の如く、其の橋の上には家屋が櫛比して一つの街路をなして居つた。エリザベス(Elizabeth)女王の時倫敦市長をしたヒュウ・ット(Hewitt)も其の家の一に住して居つたが、其の娘が川へ落ちたのを、オスボーン

(Osborn)と云ふ男が助けて、遂に兩人縁を結んだと云ふ「ロマンチック」な話も傳はつてゐる。倫敦の塔橋(Tower Bridge)は中世の防護橋から意匠を取り來つて、新しい目的の爲に作られた一例であるが、橋梁専門家は餘り之を褒めない様である。

七 波斯の橋

私は以上歐羅巴の橋ばかり述べて來たが、是は決して東洋の橋に見る可きものが無いと云ふ理由からでは無い。たゞ古い橋から話を始める必要と、かの『橋の書』の影響は何時の間にか斯くなさしめたもの

に過ぎないのであつて、我々は波斯や支那に注意すべき橋が少からず造られたことを忘れてはならない。

波斯に於いては昔からアッシリヤの建築の影響によつて、煉瓦の建築と「アーチ」の構造は、自から非常の發達を示して居つたから、是が橋梁にも應用せられたに違ひない。併し其の後羅馬の橋の影響もあつて、遂にチグリヌス (Tigris) 河上にハツサン (Hassan) や、ヂアルベクル (Diarbekr) やシシュテル (Shushter) にある様な羅馬の大橋が現はれた。殊に此の最後の者は「プル・イ・カイザル」(Pul-i-kaisar) と稱せられ、ササン朝 (Sassan) のシャール (Shapur) 一世の時、羅馬のヴァレリアン (Valerian) 帝の送つた工人の手に成つたと傳へられてゐる壯大な橋であるが、今日では當時の面影



橋ルザイカ・イルブス波

は多く残つて居ないと云はれてゐる。

イスフハン (Isfahan) のゼンデー・ルッド (Zendeh Rud) 河上にある「ブル・イ・カ
ージュ」 (Pul-i-Khajju) の橋は、蓋し波斯の橋の中で最も壯麗を極め而も雄
大なものと稱す可きであらう。是は程遠からぬ聖イレネー (Saint Irenée)
附近のリヨン (Lyon) にある羅馬の時代の水道橋の遺址から多少得來
つた處もあつたらしいが、其の二段に並列した各二十四の「アーチ」は尖
頭の亞刺比亞式である。材料は主として煉瓦で作り、中央と兩端には
六角の涼亭が附加せられてある。今こそ橋下の水流は涸れ果て、た
だ春季雪解けの頃ゼンデー・ルッドの水嵩が増した時に人出を見るのみ
であるが、其のかみイスフハンの風流青年が歡樂を逐うて、夕涼みに集

ひ寄つたのは此の橋であつた。建築家の名は分らないが、第十七世紀の中葉シャア・アッバス (Shah Abbas) 二世の時に出来たものである。

今一つ波斯の名橋を挙げるならば、矢張りイスフハンのアリヴェルデ・カンの橋 (Ali Verdi Khan) であらう。これも前のカージュの橋の如く二段の尖頭「アーチ」を並列したものであるが、六角の涼亭は無い。併し長さは一十二百尺を越ゆる長橋である。とにかく以上二橋は共に重層の橋として歐羅巴にも多く見ないもので、其の創意は羅馬の水道橋から發したものと考へられてゐる。

波斯の橋は斯の如く東洋ではありながら、矢張り多く羅馬橋の系統以外に出でないものであるらしい。印度の橋に就いて多くを知らな

い私は、次に支那の橋を見ようと思ふ。

八 支那の橋と朝鮮の橋

支那は東洋に於ける橋の國である。殊に水澤の多い南方に於ける支那の風景には樓閣と共に橋を閑却することが出来ない。王維以來山水畫を論ずるもの、皆橋の點綴に就いて言及しないものは無い。橋の字は説文に、木扁に喬と書くのは喬は高くして曲なるを云ふとあるが、此の木造の高い「形」をしてゐるのが、支那上代の橋の恰好をよく反映してゐるのであつて、彼の武氏祠の漢畫像石に現はされてゐる

橋は、正しく中央が高く屈曲した勾欄附の這種の橋を示してゐる。併し支那では早く漢代から完全な煉瓦の「アーチ」のあつたことは、古墳の墓室に於いても見られるから、拱橋が當時既に存在して居つても何等差支は無い。否な煉瓦石の大城壁が秦漢の頃から既に造られたものとすれば、大きな「アーチ」橋は其の間に自然的に發生したものと考ふ可きである。

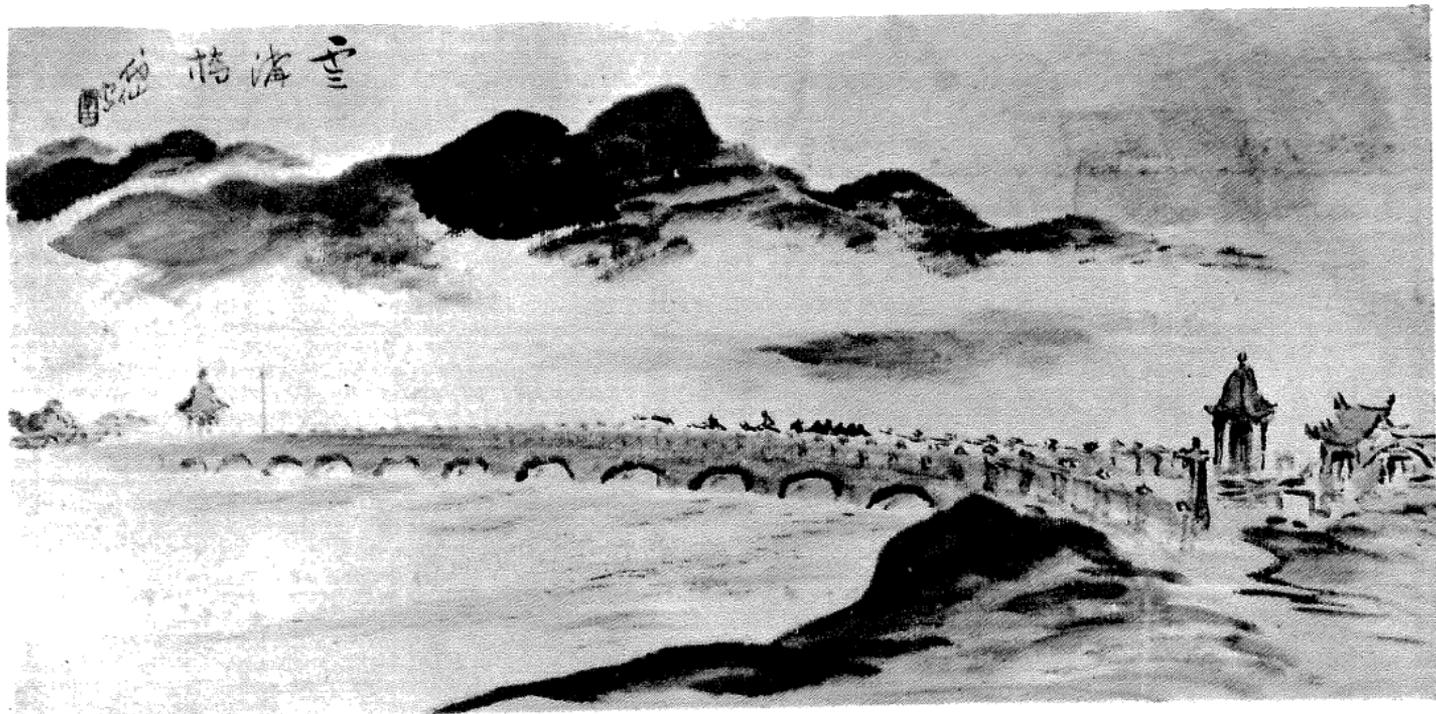
秦の始皇帝の阿房宮の賦に「長龍波に臥すは、雲あらずして何の橋ぞ。複道空を行くは、霧れざるに何の虹ぞ」と、唐の杜牧の形容してゐるのは、固より文人の筆ではあるが、少くとも彼の時代に、斯の如き長い橋が、水上にも架り、陸上にも設けられて居つたことを知らしめる。此等は併

し「アーチ」橋では無くて、寧ろ木造の桁橋若しくは、其れを寫した石橋であつたらしい。又かの「天津橋下陽春の水、天津橋上繁華の子」と歌はれた唐代洛陽の天津橋は、ヴェネチヤのリアルトの橋と同じく、當代の風流繁華の中心を形成したものであらうが、今は空しく後代の斷礎が水中に立つてゐるのみである。此の外西安の灞橋、江蘇の楓橋の如き、歴史的文學的に有名な橋も、固より在りし日の構造を残したものは無い。

支那に於いては、中古以來、石煉瓦などを以て作られた「アーチ」橋の非常に多いことは、全く日本と其の趣を異にして、却て頗る西洋式である。此の類の橋には、破風橋即ち太鼓橋となつたものが多く、是は實に支那

特殊の橋の形式をなしてゐる。水の豊かな江南地方に於いて、此種の破風橋が如何に市街や田園の美を添へてゐるか。楊柳の風に靡く水邊、虹の如く此の破風橋が架つてゐる景色は、支那の山水畫に接するものゝ常に親しむ處であつて、平遠なる支那の風景は、此の「アーチ橋」の曲線によつて始めて其の變化の妙趣を發揮してゐる。杭州西湖の橋の如きは即ち其の最も顯著なる一例である。

併し支那の「アーチ橋」にも太鼓橋でない橋床の稍平たいものも澤山ある。マルコ・ポロの記事などによつても、此種の大きな石橋が元代から四川其他に存在して居つたことを知ることが出来る。北京の萬壽山に遊んだものは、此の宮苑に支那の各種の橋梁建築が、一幅の畫圖の

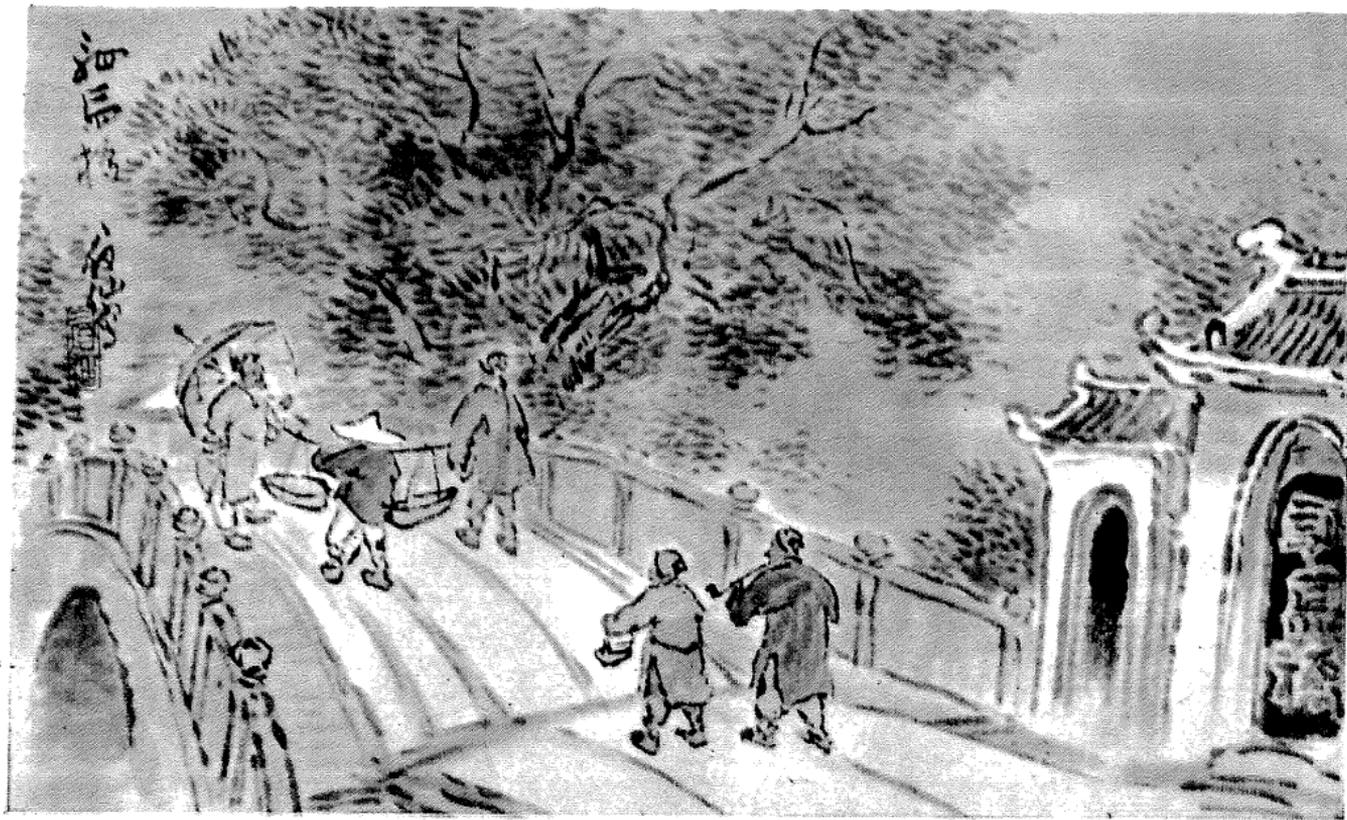


〔福田眉仙君畫〕

九 橋溝蘆近附京北

福田眉仙君畫

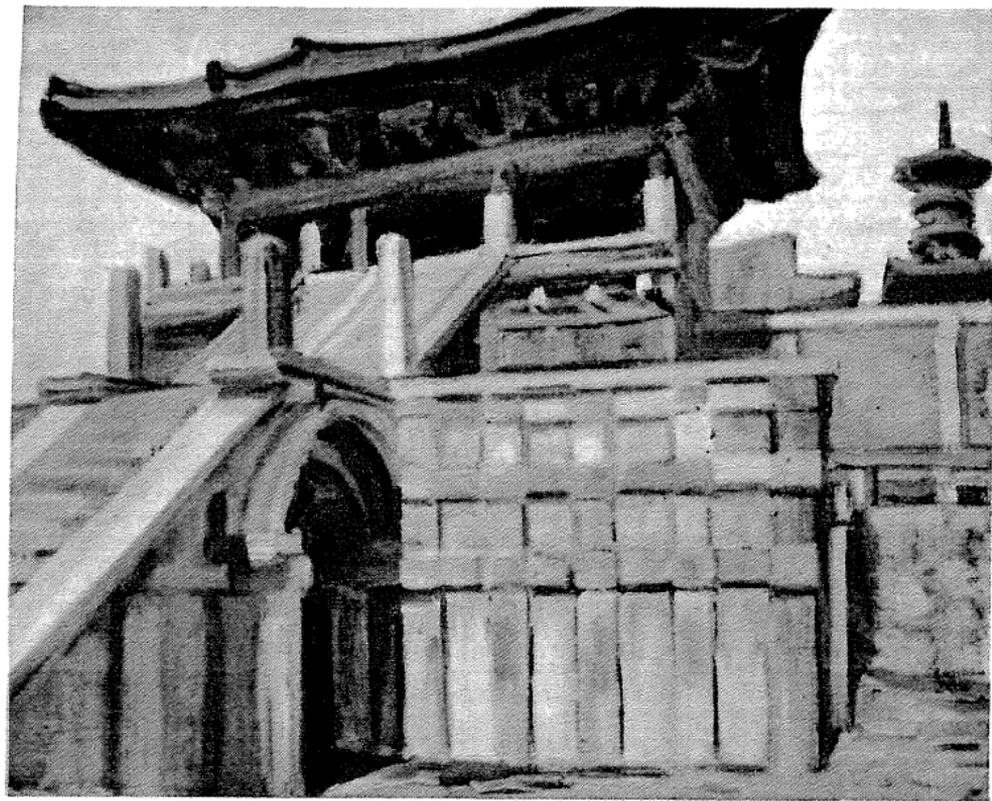
支那四川成都驕馬橋



如く縮映せられてゐる美觀に驚かざるを得ないであらう。

支那の美術は未だ佛教關係のもの以外には、餘り深く研究せられて居ない。それ故私は今一々其の建造年代を明かにした橋の例證を擧げ得ないことを憾とする。併し今試みに福田眉仙畫伯の「支那大觀」などに寫された、無限の變化を示してゐる支那の橋梁の三四を指摘して見るならば、先づ北京の近傍渾河に架せられた蘆溝橋がある。是は十三の「アーチ」を有する壯大な石橋であつて、マルコ・ポロの書に記された「プリサンギン」(Pulisanjin)なる橋であらうと云はれる。又た南支那揚子江流域では四川崇慶州の柘江橋は樓閣の如き橋臺を連ぬるに鐵線を以てし、其の上に橋板を敷き、頗る奇觀を呈してゐるが、灌縣の安瀾橋

は、更に其の原始的の形を残したものであつて、橋脚は中央のを除く外は木の丸太を以てし、而も其の上には屋蓋を置き、橋索は竹を以て造り、風雅と奇巧とを併有して居る。而して此の竹索の緩みを緊張する爲め、兩端橋臺の内部に木桿を樹て、之を回轉す可き装置を有するのは頗る面白いことである。又た清溪の瀘定橋は長さ三百一尺の鐵索橋であつて、前二者と共に最も注目す可き四川の三橋をなしてゐる。此の外成都の九眼橋、新繁縣の古龍橋と一々取り出で、は、其の果てしを知らぬ位である。私は將來此の方面にも興味を有する人が盛んに出て、世界に於いて最も橋梁の美觀に富む支那の「橋の書」が現れんことを切望する。



太田喜二郎君畫

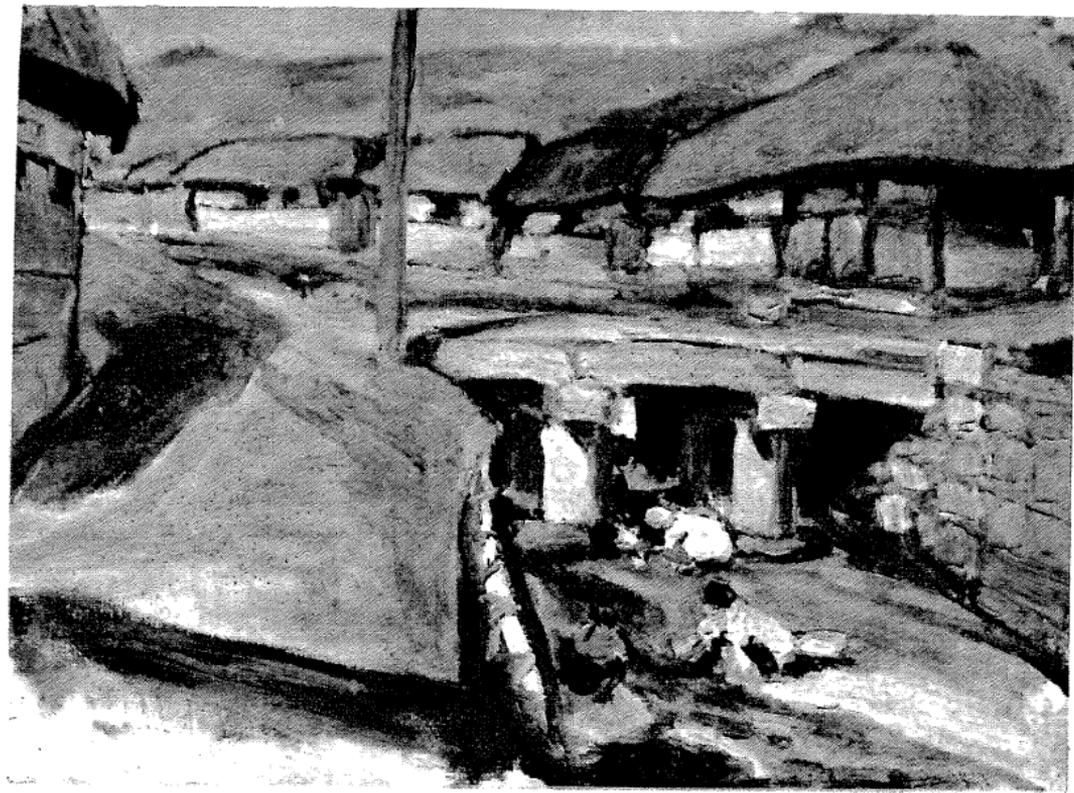
朝鮮慶妙佛國寺青雲白雲橋

次に朝鮮は支那の影響によつて、夙に支那式の橋を建造したものと想像せられる。新羅の舊都慶州に近い佛國寺には、其の門前の階段に、青雲、白雲の二石橋があつて、高い反り橋の形を示してゐる。是は眞の「アーチ」橋ではなく、一の桁橋であるが、新羅時代に朝鮮に於いて此種の石橋が既に存在して居つたことを知らしめる珍らしい遺物である。

併し私は朝鮮に於ける支那式の「アーチ」橋として、水原の華虹門下の石橋程氣に入つたものは無い。是は城壁と橋とが一緒になつたものであるが、其の傍にある訪花隨流亭と共に、朝鮮の風景中最も見ることの、一つであり、其の規模も亦大きい。李朝の建造であるが、其の年代の新古は必ずしも論ずるを要しない。近年水害に會つて破壊せら

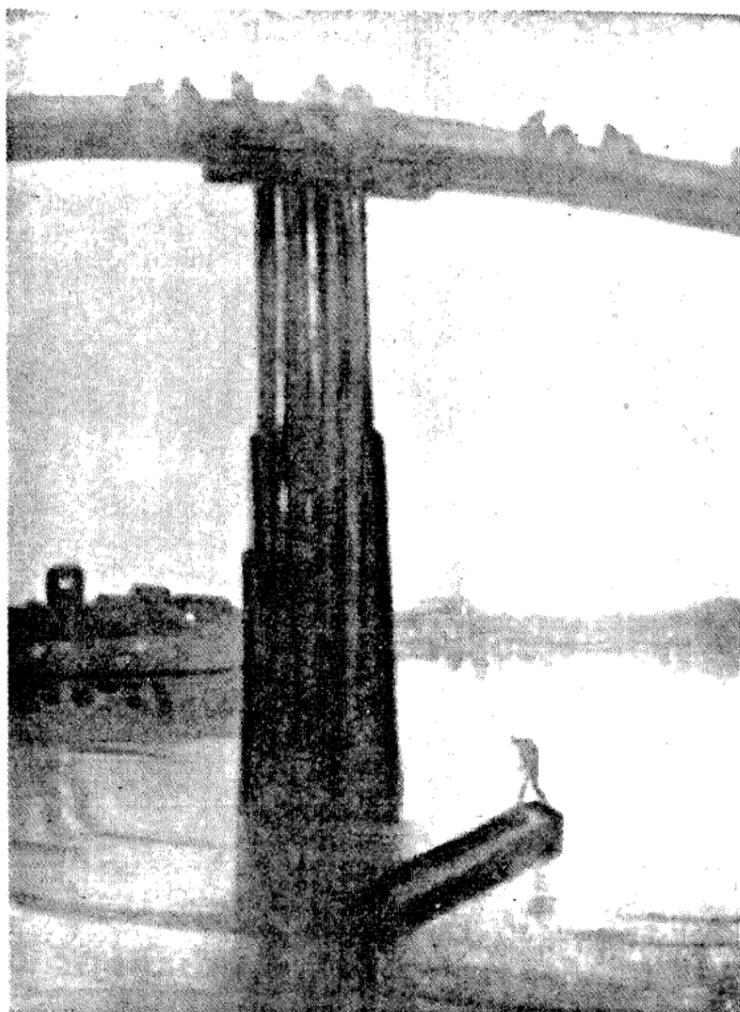
れたとの事、私は再び舊觀に復する日の近からんことを切望して止まない。

桁式石橋の見る可きものも朝鮮には多い。京城の水標橋、開城の善竹橋の如きは其の好例であるが、京城中の堀川には、名もない橋に忘れ難い畫趣を存するものが尠くない。面白い勾欄と重厚な手法とは洵に氣持がよく、殊に其の橋臺石柱の隅角を水流に向はしめてゐるのは、半島獨特のやり方と見える。兎に角石橋の美觀は日本に於いてよりも、遙に朝鮮に於いて著しく發揮せられてゐることは、愛橋家の忘れることの出来ない所であらう。



濱田青陵畫

朝鮮京城市中小石橋



〔ホイッスラー筆〕

橋のーシタ ッパ古

九 日本の橋

廣重や北齋の版畫にある橋の景色を、如何に西洋人が珍重しても又ホイスラーが其の影響によつて更に面白い橋の圖を作つたとしても、日本は美しい橋の國と誇り得る資格は無い。併し其の貧弱な橋でさへも、如何に日本の風景に貢獻してゐることの大きいか知り度いならば、日本の風景畫から橋を取り去つて見て、之を想像するが宜い。

原始的の橋の時代を別として、建築としての橋を日本に出現せしめたのは、矢張り支那建築輸入後のことである。而も他の建築にも石煉

瓦のそれが支那から傳はらなかつたと同様、橋梁に於いても日本はただ支那の木造建築を襲用した丈けであつた。斯の如くにして、日本には長い間遂に「アーチ橋」の出現を見なかつた。大化年中僧道登が宇治の長橋を作り、弘仁年間難波の長柄に大橋を架けたのも、固より木橋に違ひない。此等は橋床面の稍、平かなものであるが、かの高い反り橋の如き裝飾橋も、神社其他に愛玩的に作られたことは、可成り早くからあつたものと思はれる。是は恐らく支那の木造橋若しくは石造の「アーチ橋」を摸したものであらう。嚴島神社にある反り橋は毛利元就時代のものとして、現存の最も古い例に數へることが出来る。それは扱て描き嚴島神社全體は或る意味から橋梁上の神社建築と見る可きもの

流流樵派 其疾如箭
世有釋子 名曰道登
即因微善 棄發大願

碑斷橋治宇城山登道

であつて、橋梁家の見逃すことの出来ない建築である。

石造橋も日本に於いては、たゞ桁式の木橋の形式を襲つたものであつて、其の材料特有の性質を發揮せしめた、アーチ形の橋は長く出現しなかつた。而して此の石橋の出現は戰國時代以後、築城術の發達に附隨して進歩した石工に負ふ所が大である。而して太閤秀吉は築城の上からも架橋の上からも、永久に記念せらる可き人物である。即ち大阪の天神、天滿、難波の三大橋、京都の三條、五條の橋、伏見の豊後橋の如き長橋は、彼の手によつて始めて出來、或は面目を一新したのである。

三條、五條の橋は今なほ其橋臺の石柱と、勾欄の擬寶珠の銘に見るが如く、秀吉建造時代の遺構を傳へてゐる。此等は共に半石造とも見ら

れるものであるが、近江日吉神社にある石造の三橋は天正十四年の建設であつて、三橋各々其の様式變化を示し、簡單より複雑に移つてゐる。具合は、貧弱なる日本の橋梁中最も注目に値するものであらう。

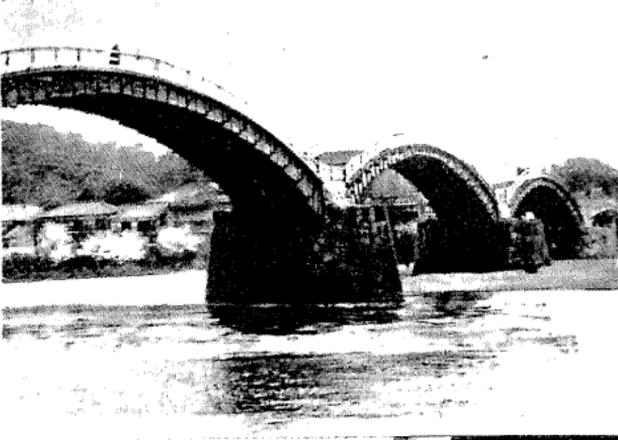
徳川時代に於いて江戸及び地方各城下で出來た大小の橋に就いては、一々述べる必要もなく、多くの橋の歴史には何の關係する所もない。千遍一律の木造の桁橋である。たゞ此の間にあつて日光に造られた漆塗の神橋と、周防の錦川に架せられた錦帶橋は、支那式の石造の穹窿橋の外觀を、木材によつて試みようとした努力を賞讃するに足りる。之と共に九州各地に於いて支那式拱橋の影響によつて眞の「アーチ」橋が所在に出現したことを記憶す可きであらう。是は寛永十一年支那



(岩井君寫眞)

15

橋宮本社神吉日江近



橋帶錦防周

の僧如定が長崎の興福寺に來往して、架橋の法を傳へたものであつて、
今なほ長崎の酒屋町から磨屋町にかゝつてゐる眼鏡橋が、當時のもの
であると云ひ、諫早にも殆ど之に近い眼鏡橋がある。其後江戸にも享
保年間目黒川に同式の橋が造られたと云ふ。此の支那式拱橋と西洋
の刺戟とから出現したのは、かの明治六年東京市中に作られた萬世橋
の眼鏡橋であつたことは、羅馬以來の「アーチ」橋の歴史を知るものゝ、却
て驚き入る處である。

斯の如き貧弱極まる橋の歴史を持つ日本人が、橋梁に對して大なる
趣味を有しないのは、寧ろ自然のことであつて、之を多く大工職人の手
に任せて、たゞ賑かに渡り初め式丈けをやれば宜いと思つて居たのは



何の不思議もあるまい。

一〇 鐵橋と混凝土橋

人類以前の橋から長い橋の歴史を、コックと踏み渡つて來た我等は今や到頭現代の橋の時代に到著した。現代に於ける各國の橋に就いて一々詳しく述べることは、已に大分草臥れて仕舞つた私の到底堪へ得ないことであつて、忍耐強い讀者と雖も先刻御免を蒙られることであらう。それでたゞ簡單に要領丈けを云ふが、現代の石造は大體に於いて羅馬橋、殊には復興期の橋の形式を繰返してゐるもので、例へ

ば現在の倫敦橋の如きも、畢竟フイレンツエの「ボンテ・トリニタ」橋の系統を出でないものである。混凝土或は鐵筋混凝土橋と雖もたゞ此の石材（若しくは木材）に代ふるに、新しい材料を應用し、之によつて橋梁の跨徑が大きくなり、凡てに於いて強さを加へたものたるに過ぎないと言つて宜しい。

木造橋は第十八世紀の中葉、獨逸のグルーベンマン (Ulric Grubemann) が迫持を應用して新しい構架をシャフハウゼン (Schafhausen) に試みて以來、此の式の橋は亞米利加に於いてブルジネット (Bludgen) などの手によつて盛に造られたが、畢竟比較的安價であると云ふ丈けで、其の構架法は全く鐵橋の方面に奪はれて仕舞つた。それで木造橋は今日では全

く過去の遺物として存するに過ぎないのであるから、況して日本に於ける従來の木橋の如きものは、たい歴史的に必要な特別の場合に其の形式が保存せらるべきに止まる運命を持つてゐる。要するに今日は石造橋及び其の一種と見る可き混泥土橋と、新に十九世紀に於て發生した鐵橋の時代たることは、誰人も議論を挾む餘地のないことである。

鐵造の吊橋と構桁橋とは近世に於て、グルーベンマンの木橋から發達したものと考へられるが、其の起源は已に言つた如く遠く天然の葛の橋、殊には支那にもある棧橋、綱橋など呼ばれるものに結び付く。而も私の驚いたことは、橋の書の著者スパーロー氏が、歐洲の鐵造吊橋建

造の示唆をなしたものは、實にキルヘル(Athanasius Kircher)が第十七世紀に支那の見聞記を書いて、支那の吊橋例へば西支那アウ縣、四川の安縣の誤か)などにある鐵索を使用した吊橋を歐洲に紹介したのにあるらしいと云つてゐることである。私は果して此の見解が正しいかどうかを知らないが、若し果して此の通りであるならば、中華民國人は宜しく少しばかり鼻を高くしても宜いと思ふ。

それはさてグルーベンマンの木橋などから、遂に今日世界に行はれる各種の大鐵橋が發達して、或は構桁橋(Girder bridge)となり、其の一種として桁木橋(Cantilever bridge)と稱するものを生じ、或は大きな吊橋(Cantension bridge)を現はしかの蘇國のフォース橋(Forth Bridge)、英國のメナイ橋

(Menai) 加奈陀のケベック (Quebec) の橋、ウィリアムスブルグ (Williamsburg) の橋などの類を見るに至つたことは驚く可き現象である。是等の鐵橋は大なる跨徑を渡すことが出來、従つて橋臺を節し得るのみならず、其の費用の割合に、非常な強力と堅固さとを有する所から、特に鐵道橋に盛に利用せられるに至つたことは我々の熟知する所である。而も鐵材それ自身も鑄鐵から鍛鐵となり更に鋼鐵となり、其の強度を増大したことは、石造橋の場合に於いて、石煉瓦が鐵筋混凝土となつたのと同様である。

鐵橋の發生は同時に橋梁の形式に一大變化を與へた。かの鐵造の構桁橋に見るが如き複雑なる曲線と直線との結合になる一種の骸骨

は、我々が從來未だ曾て想像しなかつた、非常の重力に堪ふるものとなり、一見纖弱な感を與へる外觀と其の實際の性質とは全く矛盾するものとなつた。鐵橋に對する審美上の批評は主として此の方面の幻覺から起つたのであるが、我々は今や百年に近い經驗からして、漸次此の矛盾の感から脱却して、一の新しい橋梁の形式を、其れ自身の成敗から批評し得る様になつたと云ふことが出來る。

私自身は或る種の鐵造構桁橋や吊橋に於いて、新しい橋梁の美觀を感得し、其の曲線と直線との結合の間に一種の「リズム」を發見し得ると信ずる。堅實重厚なる石造の拱橋などに於いて、若しも男性的の美を認めることが出來るならば、輕快奔放なる鐵造橋に於いて女性的の美

が現はれ得るのである。彼を以て地上の美と贊するならば、是は或は空中の美と稱するに足るかも知れない。又かの巴里のエッフェル塔(Eiffel)に於いて、レナック(Rainach)氏が新しい「ゴシック」建築の精神を認めることが出来ると云つた如く、私は鐵橋に於いて新しい「ゴシック」式の橋を見、或は第二十世紀に於いて完成せらるべき鐵材建築の新様式の美が此處にも其の一部を現はしてゐると云ひ得ると思ふ。

一一 橋の美と橋の理想

橋の話は渡り盡して今や彼岸の橋詰に到達せんとしつゝある。

而して私は最後に橋梁の美と風景との關係を考察し、更に橋の理想と將來の橋に對する私の希望を述べることの出來る時期に際會した。是は橋梁の専門家ならぬ私には極めて自由なる議論を上下し得る位置に在ると共に、其の論旨は實際上の技術家には他山の石なる價値を有するに止まるであらう。併しそれで私は充分である。

橋の美は飽迄其の周圍の地形と相關つて、獨立的なることを得ない。是は橋が多くの場合に於て、他の建築よりも、一層實際的の用途と痛切なる關係を有することを意味してゐる。第一其の架橋す可き河流地勢の束縛を受け、第二に其の橋梁の上を通過す可き重量を計算に入れなければならぬ。併し此の條件を犠牲に供することなく

して、美術的要求に應ずることは、決して出来ない相談では無い。此處が單なる技術家と、眞の建築家の差違を生ずる所以である。

美的要求とは必ずしも裝飾の附加を意味するものではない。他の建築と同様橋梁に於ても構造的に無用なる裝飾を附加することは、畢竟綺羅を装ひ顔面に粉粧を施すのと同じく、多くの場合無用のことである。我々は寧ろ裸體として美はしい建築、橋梁を要求する。それ故石造橋の石材の仕上げの如く、近接して見なければ分らぬ様な部分に無用の費用をかけることさへもホスキング氏は排してゐる。況んや餘計な彫像や裝飾を附加するが如きは、寧ろ橋梁の美を破壊する外に何等の效用も無い。スパロー氏は羅馬の聖アンジェロ橋の彫像(ベルリ

ニ(Berini)の附加した)や、巴里の「ボン・ネイフ」(Pont Neuf)の橋の「アーチ」の上の裝飾の如きは、其の排斥す可き裝飾の附加として教へてゐる。我々は日本の新しい橋に於いても、徳川家康や太田道灌の彫像を店頭の商品の如くに取付け、獅子や「スフィンクス」の無意義な彫刻を飾つてゐる實例を多く知つてゐる。

橋梁は其の環境の自然と調和しなければならぬ。其の土地の歴史を無視して設計せられてはならない。併し是は自然に征服せられ、矮小貧弱なる橋を造ることゝは別である。否な自然を征服しながら之と調和するのである。柔和なる山水に之を破壊するが如き突飛な重苦しい橋は排す可きであり、豪宕な風景に纖弱な外觀を有する橋は

禁物である。古い建築に接する土地に、之と一致しない新しい様式の橋は避く可きである。優しい加茂川の上には雄大なる橋を必要としないのみならず、三條、五條の橋の如きは、其の材料の變化は試みても、形式丈けは永久桃山時代のそれを襲ふ可きであらう。

隅田川の如く、加茂川の如く、淀川の如く市街の緊要部を通過する河流に架せられる並行した多くの橋は、その一個々々のみならず、之を川全體として考へなければならぬ。即ち各橋梁は單調を破つて、各變化を試みながら、而も其間に突飛な不調和はあつてはならない。一の橋は其れ自身の美を發揮しながら、他の橋の美を傷けてはならない。一つの橋の上に立つて、同時に多くの他の橋の美を享受し得ることは、川

の都會に住む人の特權であることを忘れてはならぬ。

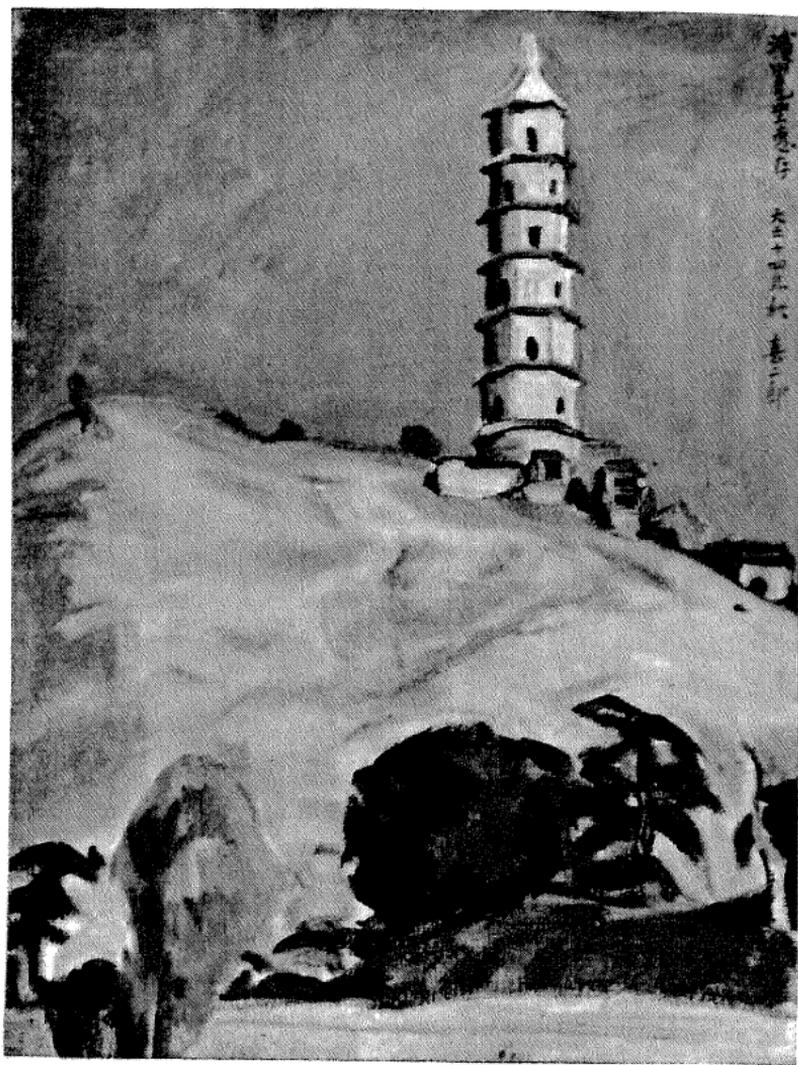
橋の理想とする所の本質は、ホスキング (Hosking) 氏の言ふ通り、其の主要なる線條の結合は常に簡單にして、而も大膽でなければならぬ。併し大膽とは決して安全堅固を無視すると云ふことでは無く、此點に於いては計算以上の重量に堪ふる橋を作る爲に、橋梁の設計者は綿密慎重に過ぎる位でなければならぬ。我々の最も恐るゝ橋は、所謂科學的の遊戯によつて作られた橋と、費用を節約した安物の橋である。世界各國に於ける大きな鐵橋の幾つかは、此の二つの理由によつて屢覆滅した。一哩半の長さを有し、約三百五十萬圓を費したかの英國のタイ橋 (Tay Bridge) が、ブーチ (Bouch) 氏の誤つた設計と粗惡なる建設に

よつて、一夜暴風に會して忽然として影を沒した慘事の如きは、我々をして戰慄せしめる所の一例に過ぎない。

私が最後に言及して置き度いことは、橋梁の防備である。歐洲中世の如く地方的戦争のない現代に於いて、之を云々するのは可笑しいやうであるが、スパーロー氏は歐洲大戦中その『橋の書』を出版して特に此の事に深慮を費してゐるが如く、今や巨砲と空中の爆弾とは、永久の平和の來る迄我々の忘れることの出来ない橋梁の敵である。市中の要路の橋は固より、田舎に於いても重要な橋が一發の砲弾や一包の空中爆弾の爲に破壊せられた時のことを思ひ見よ。木造橋の危険極まることは云ふ迄もないが、かの鐵造構桁橋の類に至つては、其の一要部を

破壊せられたならば、直に覆滅する外はなく、其の長い跨徑は急速に修理することの出来ない不利益を有してゐる。市街に於いては鐵橋の骸骨は多くの場合に其の美觀を發揮し得ないのみならず、斯の如き危険を有する鐵造橋(天神橋、天満橋の如き)は宜しく排斥す可きである。石造若くは鐵筋混凝土の拱橋の跨徑の大きくないものは、斯る慘害に會しても全橋の破壊は稀であり、又た直に修理を施すことが出来る。我々は中世の橋の如く要塞を橋に附加して之を防備する必要はないが、其の本質自身に於いて最も防備的である橋を持たなければならぬ。戦争以外に我々は地震火災なる大敵を防禦しなければならぬことは、昨年の東京の災害によつて誰人も心に銘記したことであらう。之

に對する防備も亦た大なる跨徑を有し、餘りに科學的なる橋梁を避くる外には、可燃質の材料を排す可きことは、戰爭の場合と殆ど同様である。水の都會大阪は先づ此の災害の教訓によつて、橋の防備に注意して今や多くの貧弱なる木橋は其の影を沒せんとしつゝある。私は此の際大阪市民が大阪なる都市の美觀に最も重要なる意義を有する橋梁に向つて、防備的施設を試むると同時に、新に出現す可き石橋と混凝土橋とに於いて、よく其の實用と美觀との調和を示さんことを希望して已まない。これ一に私が此の橋の話を書き出した動機であり、此の話が多少たりとも市民と市當局者の注意に上ることがあれば、獨り私の喜びばかりではないと思ふ。



塔山泉玉京北

畫君郎二喜田太